

## 社会 保障 言 論

最終 回

暮ら すと 人 生 を  
支 える 物 語

**現** 代日本の社会保障は、1950(昭和25)年の、一通の勸告から実質的に始まった。それから70年、まだ切れば血の出る生々しい物語である。

## 制度 審 の 初 勸 告

「…お前のことは大言にすぎるといであらう。そうだ。それは私も知っている。実のところ、私は、一応かくいうことによつて…諸君の批判を挑発したいのである。…」

前年発足の首相の諮問機関「社会保障制度審議会」が50年10月、時の宰相・吉田茂に突き付けた総合勸告の序説である。

第2次世界大戦の犠牲者は300万人以上、罹災者1000万人以上、敗戦後は失業、食糧難、悪性インフレが襲いかかった。違法な闇米を拒み、配給のみで耐えた裁判官が栄養失調で死亡するという悲劇さえ起きた。

「…いかにして彼らに最低の生活を与えるかである。いわゆる人権の尊重も、いわゆるデモクラシーも、この前提がなくては紙の上の空語でしかない…」…国によっては、「ゆりかごより墓場まで」

すべての生活面がこの制度によって保障されている(中略)貧と病とは是非とも克服されねばならぬが、国民は明らかにその対策をもち得るのである。…」

この檄文にも似た勸告を発した審議会の会長は、戦前からの言論弾圧を耐え抜いたマルクス経済学者で法政大学総長、大内兵衛ひょうえだった。

本文では、社会保障の全体像に加え、社会保険、生活保護、公衆衛生・医療等の制度ごとにあるべき姿を初めて描いた。そのモデルは、若き日にスラム街で貧民救済に取り組んだ経済学者ウイリアム・ベバリッジが提唱した英国の福祉国家構想だった。

## 「皆 保 険 ・ 皆 年 金 」 の 時 代

61(昭和36)年度に達成された「国民皆保険・皆年金」体制で、社会保障は拡充期に入る。社会保障制度審議会は、翌62年、2度目の総合勸告を行った。

国民を貧困・低所得・一般の各階層に分類し、その状態に応じた諸制度の体系を試みた。高度経済成長の入り口で、取り残されそうな人びとへの配慮を求めたのだ。

会長は大内兵衛の続投で、首相は「所得倍増計画」を進めた池田勇人、気楽なサラリーマンを演じ大人気の植木等が歌う「スーダラ節」が街に流れる頃だった。同審議会は建議や意見をたびたび出したが、「総合勧告」はわずか3回。最後は95(平成7)年であった。

当時の村山富市首相に提出された勧告は「社会保障体制の再構築(勧告)」(安心して暮らせる21世紀をめざして)と題し、次の世紀へ、とくに高齢社会を支える介護保険制度の創設を強く訴えた。最後の会長は、東京女子大学長などを務めた労働経済学者の隅谷三喜男。大ベストセラーの五味川純平著『人間の条件』の主人公は、戦場でも人間の誇りと良心を必死で守る。そのモデルの1人といわれた行動派だった。

## 「中福祉・低福祉」の危機

2000年度の介護保険施行で、介護給付費は「福祉」に分類され、長年の「年金5対医療4対福祉1」の配分はようやく「5対3対2」へ切り替えられていく。超高齢社会へ向けた社会保障の「古い支度」である。

表 「総合勧告」時の社会・経済データ

年度	給付費	GDP比	経済成長率 (実質)	平均寿命(歳)		高齢化率
				男	女	
1950	1261億円	?	11.0%	58.0	61.5	4.9%
1962	9219億円	4.13%	7.5%	66.2	71.2	5.9%
1995	64兆7191億円	12.83%	2.7%	76.4	82.9	14.6%
2017	120兆2443億円	21.97%	1.9%	80.6	87.3	28.0%

だが、「福祉」のうち子育て支援費は先進国の中で最低レベルが続く、少子化は加速した。「旅支度」が整わないまま新たな世紀を歩み始めた。

翌01年度の省庁再編に伴い、社会保障制度審議会は半世紀の歴史に幕を閉じた。その役割の一部は「経済財政諮問会議」に託された形だが、社会保障を主体に政治や経済へ働きかける最高レベル

の審議会は姿を消した。

初勧告の1950年度は、政府が社会保障統計をまとめ始めた年で、給付費は1261億円(国内総生産(GDP)は不明)、翌51年度は1571億円、GDP比2・87%。いま最新統計の2017年度で、給付費は120兆2443億円、GDP比21・97%に膨らんだ(表参照)。

この膨大な給付費をどう賄うか。財政は20年近く赤字国債に頼り、国と地方の債務残高は1000兆円を超えた。給付と負担の緊張関係を一刻も早く取り戻さなければならぬ。

最後に付け加えると、17年度の遺族恩給等の戦争犠牲者給付費は3412億円ある。戦争の惨禍を消し終えるには1世紀もかかるのだろう。

### ■連載終了のご挨拶

2000年4月号から「今を読む」と題して連載を始め、04年度から現在のタイトルに改め、通算20年になりました。本号をもって筆を置きます。長年のご愛読に深く御礼を申し上げます。

### ■宮武 剛 (みやたけ 剛)

毎日新聞社・論説副委員長、埼玉県立大学、目白大学・大学院の教授を経て、(学校法人)日本リハビリテーション学舎 理事長、NPO「福祉フォーラム・ジャパン」副会長も務める。